

# 想い出　ひとりぼっち

松橋健一

人間の記憶はあてにならない。たった一日前の事でも、思い出せないかと思えば、何年たっても、忘れない事もある。特に嫌な想い出は、忘れないようだ。思い出したいのに、思い出せない事。忘れたいのに忘れられない事。皮肉なものだ。

自分の事を、「僕」と言えなかった。周りの大人に、「健ちゃん」と呼ばれて育つたため、自分の事を、自分でも「健ちゃん」と呼んでいた。なんの不自然さも感じなかった。

健一だから、健ちゃんと呼ばれるものと、思っていた。そんな小学校入学前の事。小学校に上がってからは、さすがに自分の事を「健ちゃん」とは、呼べなくなった。みんなが使っていた「俺」と、呼ぶようになった。小学校一年生のことだった。楽しかったはずの、一年生の頃。記憶があいまいで、今では思い出せないことが多すぎる。

## 一

健ちゃんは、小学校の三年生。学校での担任は、一年生から三年生まで、毎年変わった。いずれも、男の先生だった。今でも一年生の時の担任、今野先生は大好きだ。歌をたくさん教えてくれた。理科の得意な先生だった。いまだに年賀状のやり取りもしている。が、もう四十年以上、会っていない。季節の挨拶だけだ。元気でいてくれるだろうか。もう、定年退職して、いろいろとなにやらやっているらしい。現職時代よりも、忙しいと便りには書いてある。きっと元気なだろう。葉書が届くと嬉しいものだ。

二年生の時は、福地先生だった。大学を出たての、若い先生だった。何か怒涛のように過ぎ去った一年だったような気がする。これと言って覚えていることもないのだが。そうだ、手塚治虫の漫画「火の鳥」を教えてくれたのは、福地先生だったはずだ。

三年目の担任教師は、田村先生だった。健ちゃんの住んでいた地域では、珍しく学習指導に熱心な教員だった。熱心と言うよりも、異常とも思えた。健ちゃんが住んでいたのは、工場地帯の下町だった。それも小さな町工場の多いところだった。空から煤煙が降るような町だった。そんな地域では、勉強よりも元気であることが、優先されていた。

当時は、まだ家庭訪問が普通で、何班かに分かれて、児童の家庭を担当が訪問して歩いた。家庭訪問の時期なのだから、まだ学年の始めの頃だったと思う。いつものように、ランドセルを放り投げて、遊びに出かけた。家庭訪問の日だった。先生とその日に回る児童の集団を見つけて、遠くから「先生！」と、手を振った。何か言っていたが、聞こえなかった。そのまま遊びに出かけた。その時は、一人だったのか、それとも何人かいたのか、覚えてはいない。

翌日、朝一番に、教室の前と呼ばれた。自分以外にも何人かいたと思うが、わからない。いきなり怒られた。学校から帰ったら、まず一時間は勉強しろと、学年の初めに言われていたのだ。まさか、そんなことで、本当に怒られるとは、思ってもみなかった。それまでの二年間の学校生活からは、考えられなかった。ひとつのカルチャーショックだった。朝の時間だったが、見せしめのように、かなり長い時間怒られていたと思う。悔しかった。ただそれだけだった、覚えているのは。

健ちゃんは、学校の成績の方は良かった。ドン臭いため、体育と音楽はさんざんだった。その点では、まあ誉められていた。根が単純だから、誉められると頑張る。成績は順調だった。だが、たまに単純なミスで、満点を逃すと、こっぴどく怒られた。油断がいかに。集中していない。慢心がいけないんだ。そのようなことを、繰り返し言われた。それでも、クラスの中では、一番良い方の点数だったのに。

## 二

そんな三年生の初め頃、自分の周りの雰囲気が変わってきたのに、気がつきだした。クラス替えもあったのだが、それまで、仲の良かった友達たちが、自分から離れて行くのが感じられた。何となく、疎遠になっていったのだ。特に学校の中やクラスの中で、いじめられるとかではないのだが、放課後になると、気がつくといつも一人だった。学校の下駄箱や、帰り道では、孤立していた。

仕方がないので、毎日一人で家に帰って行った。それまでのように、友達と一緒に、肩を組みながら帰ることは、三年になってからは、なくなってしまった。当然、朝の登校の時も、一人だった。そんなことだから、放課後も、遊ぶ相手がいなくなってしまった。公園に行くと、いままで一緒に、三角ベースや缶けりをしていた友達が遊んでいた。しかし、誰も声をかけてくれなくなってしまうので、遠巻きに見ては公園には入らなかった。

やることもなく、駄菓子屋を回って歩いて、時間をつぶしていたが、いつまでもそれではしょうがないので、早々に家に帰った。そうになると、学校でもあまり口をきかなくなっていく。孤立。三年生になって、初めて味わった感覚だった。

そうになると、自分の頑張る道は、学校での成績を、さらに良くすることぐらいしかなかった。それが、また友達たちから、反感を招いて、どんどん孤立していった。ただ、クラスの中では、取りあえず話もするし、給食の時間なんかも、平静を装って一緒に食べていた。だが、どこかぎくしゃくしたものがあつた。そんなものはすぐにわかる。

しかし、担任の田村先生は、そんなことを知ってか、知らずか、全く関与してはこなかった。今考えると、当然、わかっていたはずではないかと思う。先生には、そんなことはどうでもいいことだったのだろう。

ガリ勉。そんなものは嫌われて、当たり前前地域だった。クラスメートの親たちは、松橋君は頭が良くて良いわねえと、言ってくれていた。何が、良いものか。どうしようもない状況の自分に腹が立った。そう思えば思うほど、さらに孤立していった。その頃は、誰一人、友達がいなかったと言っただけかもしれない。別に、自分と関わることで、何かされるわけではないが、多数派の意見として、あいつとは付き合うなという、暗黙の了解ができあがっていたのだと思う。学校から帰ると、家の中で一人で泣いていたこともあつた。その頃は、両親とも共働ぎだったので、自分で鍵を開けて、家に帰っていた。薄暗いアパートに一人で鍵を開けて入る。それだけのことで、泣けてきたっけ。

### 三

その頃からだろうか。母親が、健ちゃんの学習に熱心になったのは。姉のみえちゃんは、私立の女子大の附属中学に通っていた。小学校の四年の時から、六年まで三年間、予備校に通って、受験をした。それに倣えと、健ちゃんも勉強を強いられた。嫌だった。学校だけで十分だった。担任の田村先生は、大いに満足していたようだ。友達と遊ぶことより、五分でも多く勉強をした方が、良いと考えている先生なのだから。

幸いにして、そんな健ちゃんにとって、学校の授業は簡単なものだった。その日にでた宿題は、授業中にすべて終わらせていた。だから家に帰っても、特に急いで何かやらなくてはならないということは、ほとんどなかった。

そんな健ちゃんに、母親はドリルを与えた。今でも忘れられない。〇〇〇教育出版。名

前まで覚えている。中身は簡単なのだが、毎日コツコツと、繰り返しやっていく復習中心のドリルだった。健ちゃんは、まったくやらなかった。最初の数ページを見ただけで、ばかばかしくなっていた。毎月届く、ドリルは白紙のまま、どんどんと積み重ねられていった。

つまり毎日だった。と言うよりは、辛い毎日だった。遊びにも行けない。行っても友達がいらない。家にいても一人。この頃の健ちゃんは、心のどこかがささくれだっていたような感じがする。そんな時、健ちゃんを癒してくれたのが、本、読書だった。

三年の時の教室が、図書室の隣だった。そんなことから、学校の中休みも昼休みも、一人で図書室にこもっていた。放課後も下校の時間まで、図書室に入り浸った。読み切れないものは、借りて帰った。今でも、あの時の読書量には驚く。ジャンルは、ノンフィクション物が好きだった。当時ノンフィクションの意味はわからなかったが、背表紙にそう書いてあれば間違いないと、ひたすら読んだ。そのうち、ノンフィクション以外にも、いろいろと読むようになり、読書の幅が広がっていった。

ただ、一年生の時、今野先生に読んでもらった、モーリス・ドリユオンの「みどりのゆび」を超えるものは、なかなか見つからなかった。

読書は良かった。机に向かって本を読んでいるのだから、親も怒らない。一人でも寂しくはない。というよりは、図書室で、何人もいる中で読むよりも、一人で読む方が気に入っていた。今でも、印象に残っているのは、薄暗い部屋の中で、電気もつけず、必死になつて読んでいる。何かの拍子で、ふと気がつく、あたりが暗くなっていた。その瞬間、もう本の文字が読めなくなってしまうのだ。なんとも不思議な体験だった。

その頃、何を読んでいたのか、もう思い出せない。宮沢賢治や椋鳩十は、なんとなく覚えていた。シートン動物記やファーブル昆虫記、クストーの冒険なんかも、読んだはずだ。今はただ、寂しさを紛らわすのに、ひたすら本を読んだという事実だけが、鮮烈に思い出される。なにかしら破れかぶれだったのかもしれない。

#### 四

こんなこともあった。学級委員を選ぶ時のことだった。まあ、小学校の学級委員だから、なかば人気投票みたいなものだった。健ちゃんは、成績は良かった。クラスでは、一番だっただろう。しかし、選ばれないのだ。その頃は、三学期までであったので、年間に三人の

委員が選ばれる。一学期や二学期は、人気のある、ドン臭くない奴らが選ばれていた。健ちゃんも、いつも三学期に選ばれていた。どうでもいい時期に、仕方なく選ばれていた。まあ、しょうがないかなという感じである。そんなもんだと、自分でも思っていた。特に行事もなく、期間も短い。そんな時の、いわゆるついでの人事みたいなものだったのだろう。このことは、卒業するまで続いた。

そう言えば、クラスでいろいろと係りなども、決めていたはずだ。覚えていない。たいして重要ではなかった係りだったと思う。なんとなく孤立してからは、目立つことを嫌うようになった。また、そのころから太りだし、さらにドン臭くなったため、余計に目立つことは、嫌うようになっていった。

## 五

そんな一人の毎日は、ずっと続いた。本に出会ってからは、それほど寂しいとは思わなくなっていた。考えてみれば、これもまた悲しいことなのだが。

夏休みになっても、一人は変わらなかった。お盆には、田舎に連れて行ってもらったりと、何かと出かけたりしていたような気がする。ただ、何もない日には、朝から一人で、家の中で何をやっていたんだろう。姉のみえちゃんもいたはずだ。思い出せない。その頃は、みえちゃんが買ってもらっていた、少女マンガ雑誌を読ませてもらっていた。なぜだかわからないが、とにかく読むものならば、なんでも良かったのかもしれない。

家には、みえちゃんが小学校に入学する時に買った、文学全集があった。それらも、片っ端から読んだ。「飛ぶ教室」や「小公女」、「クオレ」など、お馴染みの外国文学には、ここで出会った。健ちゃんは、特別そう買ったものを買ってもらったことはなく、基本におさがりの物があてがわれていた。百科事典もそうだった。これは、当時の子どもたちならば、皆、そうだったに違いない。本に限らず、洋服なども上から順に、おさがりになったはずだ。健ちゃんは、上が姉だったため、洋服のおさがりはなかったが。

夏休みの間は、学校の図書室の本が読めないのが、一番の苦痛だった。公立の図書館は、我が家からは遠く、小学校の三年生が行ける距離ではなかった。だからといって、本などは、あまり買ってもらえなかった。今思うと、長い夏休みだったろう。結局、あまり外出をしない夏休みだったのではないだろうか。それまでの二年間とは、がらっと、変わってしまった。また、幼稚園の頃から耳が悪く、プールに入れなかったので、みんなが行く市

営プールにも行かなかった。そうしたコンプレックスもあって、運動嫌いにも拍車をかけていった。

そういえば、こんなことがあった。友達の少ない健ちゃんが、お誕生会に呼ばれたのだ。夏休みのことだったと思う。珍しく友達と二人で遊んでいた日だった。健ちゃんにとっては、友達と遊ぶことは、めったになかったので、お誕生会をすっぽかしていた。呼んでくれたのは、北島君（だったと思う）で、学年でも成績の良い方だった。健ちゃんとしては、クラスも違うし、あまり仲が良い方ではなかったのに、なにも問題がなかった。ところが、母親が、北島君に呼ばれている事を知り、公園で遊んでいた健ちゃんを、無理やりお誕生会に連れて行ったのだ。それまで遊んでいた友達は、呼ばれていないということで、「はい、さよなら」となってしまった。今でも覚えている。行きたくもないのに、駄菓子屋の安っぽいライダーを手土産に、北島君のうちにいったことを。そこにいたのは、学年でも、良い子とされている奴らだった。男子だけではなく、女子もいた。全部で六く七人はいただろうか。

嫌な思いをした。こんなところに来たくはなかった。なんで、小学校の三年生が、社交辞令みたいな、お誕生会をやらなきゃいけないのか。北島君のお母さんを、何なんだこの人はと思った。今でも、その時の健ちゃんの考えは、間違っていないと思う。そんなことをして、どうなるというんだ。取り繕った虚飾の集まりじゃないか。そうそうに立ち去ったのを覚えている。こんなことは、いつまでも忘れないものだ。実にくだらない。忘れてくて仕方がない思い出だ。

この一件で、三年生の時の夏休みは、さんざんだったという思いが残っている。

## 六

二学期になっても、田村先生は、勉強の手綱を緩めなかった。緩めるどころか、締め上げてきた。二学期は、行事も多い。ただ、健ちゃんは、そういったものでは、活躍ができないので、積極的に参加するということとはなかった。運動会。遠足。学芸会。確か、これらは、皆、二学期に行ったものだったと思う。それだけでも忙しいのに、前にもまして宿題は出るは、テストはやるは。

健ちゃんは、相変わらず、宿題は授業中に終わらせるし、テストの点も良かったので、苦にはならなかった。それよりなにより、図書室へいける時間が、また帰ってきたわけだ。

それがなにより嬉しかった。本の虫への道は、さらに深まっていった。この頃から、なぜか図鑑や百科事典が好きになった。もちろん物語なども読んでいるのだが、授業と授業の間の、短い休み時間などは、これらをパラパラとめくって見ていた。今思い出しても、何が面白かったのかわからない。

かなり偏執的になっていたのかもしれない。児童文学や課題図書も、安いものではなかったので、読みたいと思っても、図書室に来るまで、待たなければならなかった。相変わらずの貧乏暮らしで、たくさん本を買ってくれとは言えなかった。そう言えば、つまらない事を覚えている。六年生の頃だっただろうか。ある時本屋で、「UFOと宇宙」という雑誌を買ってくれと、母親に頼んだ。そしたら母親が、真顔で

「受験に落ちたら、これで頭を叩いていいか！」

と言ったのだ。健ちゃんは、じゃあ、合格したら叩いていいのかと、喉まで出かかった。そんなことを思い出した。

授業の内容などは、全く覚えていない。ただ、他のクラスの担任の先生が休みの時には、田村先生が、一〜二時間程度、授業をしに行くことがあった。そんな時は、受け持ちのクラスの時とは、うって変って、授業はろくにせずに、馬鹿話をしてくるのであった。他のクラスは、田村先生が来るのが、楽しくて仕方がないようだった。健ちゃんは、先生がないと、自習になり、本が読めるので嬉しかったが。そんな田村先生も、自分の担任のクラスでは、相も変わらず、勉強しろ、勉強しろの繰り返しだった。そういう意味では、不思議な先生だった。

## 七

健ちゃんは、相変わらず一人だった。三学期になっても、それは変わらなかった。何人か仲の良い友達はいたはずなのだが、覚えていない。その友達たちとも、放課後はめったに遊ばなかった。なにか、いらぬ力が働いていたのか、それとも健ちゃんは、本当に嫌な奴になっていたのか。そのあたりは、よくわからないが。学級委員になったのは、覚えていた。ただ、だからと言って、別段偉くなったわけでもないし、友達が寄ってくるわけでもなかった。先生の雑用を手伝うくらいのことだったと、思う。

三学期になってから、母親に言われた。お前も、四年生になったら予備校に行けと。その時は、何も考えずに、姉のみえちゃんが行ったから、自分もか、ぐらいにしか考えてい

なかった。その予備校は、市内でもなかなか難しい予備校だった。入塾するにあたって、選抜試験が行われる。それによって、成績順でクラス分けがされる。市内の南部の小学校から、大勢通ってくる。健ちゃんは、バスに乗って通わなくてはならなかった。まだ、その時点では、予備校とは、いかなるものかわかっていなかった。

短い三学期は、すぐに終わり春休みがやってくる。三学期は、とりたてて思い出すようなことはない。学年が終わるといった感慨もない。田村先生は、その年を最後に転勤してしまった。

春休みには、春期講習というものが予備校であり、四年生からの準備講義みたいなものだった。その前だったか、後だったかは忘れてしまったが、予備校の入塾試験があった。どこで行ったのかは、まったく忘れてしまったが、大勢の新四年生が、各地域の小学校から集まって来て、試験を受けた。この頃の記憶は、あやふやだ。

ただ、覚えていることは、健ちゃんは、予備校の入塾試験で、トップだったのだ。いろいろな学校から、試験を受けに来ていて、進学などとは、無縁と言っている、貧乏地域の小学校の児童が一番になったのだ。結果発表の日には、見に行かなかった。ただ、母親が見に行つて、おまえが一番だったと言われた。これにも、なんの感慨もなかった。ふくんと言った程度の感想だった。ただ、次の日、母親が見てこいというので、バス停三個分くらいを歩いて、張り出してあるのを、見に行った。もらったバス代は小遣いにした。名前の下に、小学校の名前も書いてあった。受験とは無縁の小学校の。母親は喜ばせようとしたのだろう。残念ながら、健ちゃんは、何の感想も持たなかった。ところが、このトップで入塾したことが、後で災いとなったのだ。

## 八

なんとなく、四年生になった。まさになんとなくだった。クラス替えはなかったのですが、級友は同じだった。ただ、担任が変わった。佐々木先生になった。佐々木先生は、この年度から、健ちゃんのいる小学校に赴任してきたのだ。いくつだったのかはわからないが、中堅の男の先生といった感じだろうか。第一印象が、妙に馴れ馴れしいと感じたことを覚えていいる。ある時、宿題をドンドン出すぞと言われ、健ちゃんは、予備校の宿題があるので、少しにしてくださいと頼んだ。すると、佐々木先生は

「それなら、学校なんか来ないで、予備校だけ行け！」



と言った。それは、憎悪の混ざった言い方だと、その時感じた。心の中では、学校に來なくてもいいのかなと、思ったりもしたことを覚えている。その時、健ちゃんの小学校からは、健ちゃんを含め、二人しか予備校に通ってなかった。後の一人は、前田君だったと思う。前田君とは、学校でも予備校でもクラスが違っていた。予備校にトップで入った健ちゃんは、Sクラスというクラスにはいった。一番成績の良いクラスだった。四年生から、進学塾に通う児童は、健ちゃんの小学校では、ほとんどいなかったのだ。

ただ、ここからが、健ちゃんの試練が始まった。まず、予備校がいかなるところか、わかっていなかったのだから。予備校の授業が本格的に始まると、いままでの学校の授業とは、比べ物にならないほど、難しかった。そしてなにより、クラスのみんが敵だと教えられるのだ。クラスメートでも、受験生は仲間じゃない。そう頭から教え込まれた。そして、毎月末、全科目のテストが行われる。それによって、席順が変わるのだった。何もわからず、のほほんとしていた健ちゃんは、四月のテストで、二十一位になってしまった。今でも忘れない、席順がいきなり一番前から、三列目になってしまったのだ。何が起きているのか、さっぱりわからなかった。学校でも一人、予備校でもやっぱり一人。健ちゃんには、ただ負担が増えただけだった。

五月のことだったと思う。予備校の懇談会があった。受験生の親を対象としたもので、生徒の親はみんな集まったようだった。その時、トップで入学しても、勉強をしないと、散々な成績になるのだと言われたそう。名前こそ言わなかったが、誰のことかは、すぐにわかる言い方だったそう。それは、帰ってきた母親から聞いた。当たり前だ、勉強などしないで、本ばかり読んでいるのだから。学校の授業のように、片手間では片づけられないのが、予備校だった。健ちゃんは、入塾して一カ月で、もう嫌になっていた。

学校では、佐々木先生に、どうしても馴染めなかった。初めの印象が、焼き付いたのだろうか。子どもの目から見ても良い先生を取り繕っているように見えるのだ。非常に薄っぺらい感じがしていた。ただ、学校の授業は、これまで通り難なくこなしていったので、こちらは問題なかった。

両親とも働きに出かけているため、夕方からの予備校には、一人が出掛けなくてはならなかった。だいたい毎日、夜の九時まで、講義があった。小学校四年生が、である。当然腹が減る。健ちゃんは、一人は慣れていた。違った意味で自立心が芽生えてきていた。そこで予備校に行く前に、インスタントラーメンを作ることを覚えた。具などない。ただ麺とスープだけのラーメン。学校から帰ってきて、予備校の宿題をやって、そして食

べるラーメン。旨かった。予備校は嫌だったが、そのひとときは至福の喜びであった。薄暗い中で、よくもまあそんな生活をしていたと思う。それでも、嫌々ながら予備校はしばらく続いた。バスに乗ることも覚えたとし、他の小学校の話聞くのも、面白かった。みんなは、何人かの同じ小学校の友達と一緒にだったので、楽しそうだった。その点では、少し羨ましさを感じていた。そんな毎日の繰り返しだったので、それまで以上に、放課後、友達と遊ぶなんてことは、なくなってしまった。

しかし、健ちゃんは相も変わらず、担任に馴染めず、自分の小学校では居場所を探せないでいた。休み時間は、図書室にいたことが多かった。放課後以外の休み時間は、それも友達と、ポツポツ遊ぶようになっていた。嬉しい事だった。ただ、学校が終わると、一人で帰宅していた。当然登校の時も、一人だった。

## 九

残念ながら、予備校は楽しいところではなかった。明けても暮れても、勉強、それも学校ではやらないような、難しい講義だった。それにしても、一クラス何人いただろう。五十人位はいたと思う。しゅんと、静まり返って、講義を受けていた。みんな真剣だった。健ちゃんは、その雰囲気だけでもうダメだった。一学期が終わるころ、夏休みには夏期講習があることに気がついた。予備校に休みはないのである。

実は、この時もう限界だった。その頃になると、仮病を使って、度々予備校を休んでいた。いや、仮病ではない。実際に行きたくないという気持ちだが、身体をおかしくするのだった。現実に、頭痛もするし腹痛もする。ひどい時には、熱もあがるのだ。不思議なものだ。それでも、なんとか続けていた。学校どころではない。学校は、片手でしかありえなかった。本も読む時間が限られてきた。予備校は宿題が多い。難しく時間がかかる。終わらないことも、よくあった。

それでも何とか、夏期講習は過ぎた。夏期講習は、普段のクラスとは違い、夏期講習だけ受講する子どももいるので、クラス編成が違っていた。そのため、雰囲気がいつもと違っていた。あと、つまらないことだが、冷房が効いていたのだ。我が家には、そんなものはない。教室で、黙っていれば涼しくて、気持ちが良い。講義なんか聴いていない。ただただ、時間が過ぎるのを待っていた、健ちゃんであった。

二学期が始まった。嫌な予備校も、また普段のクラスに戻る。それでも、Sクラスだけ

は維持していた。なんとか頑張ったのか、最前列の席に戻ることもあった。

嫌な予備校生活に、追い打ちをかけるような、事件があった。それは、今でいえばイジメだろう。上級生に、予備校へ行っていることを、とやかく言われたのだ。だからといて、殴られたり蹴られたりするわけではない。ただただ、グチグチと言われるのだ。「お前、予備校に行ってるんだってなあ」

この程度のことである。予備校に行くこと自体が珍しかったのだ。自分と同じ学年の同級生と、確かひとつ学年が上の上級生に言われ続けた。すでに嫌になっている予備校のことを、言われたくはなかったのである。そのうち、口撃はエスカレートしてきて、傘などで、ランドセルをこづかれたりした。まあ、その程度ですんだのだが。その時一緒にいたはずの同級生は、どうしていたのか、全く記憶にない。はたしてその場にいたのだろうか。今となってはわからない。

そんなことがあって、健ちゃんは、予備校へ行くのを拒否しだったのである。今まで、本当にささやかな抵抗しかできない、弱虫の健ちゃんであったが、この時ばかりは、意地を張りとおした。ただ、母親は基本的なことがわかっていなかった。その上級生を、教えると言いだした。確か学芸会の時、健ちゃんは照明係だった。体育館の上の通路にいるときだった。母親が、誰だと下から怒鳴っていた。そんなことをしたら、どうなるかわかっていないのである。正義が必ず通じる相手と、そうでない相手が判断できていない。自分をイジメていたのは、後者である。そんなことで、余計に学校へ行くことが辛くなるということが、母親にはわかっていなかった。結局、母親の中では、健ちゃんが話を作ってイジメられているふりをしているのだと、決めつけたのだった。話しにならなかったが、仕方がない。ただし、健ちゃんは予備校へ行くことは、免除されたのだった。

その時、予備校に通っていたのは、健ちゃんを含め、三人になっていた。一人、夏期講習の後から、通いだしてきていたのだ。今度は、違った形で健ちゃんは追い込まれてきた。それは、予備校に行っている、二人が健ちゃんに対し

「脱落者！」

と、言い出したのだ。後でわかったのだが、どうも予備校で中途退塾した人間を、講師たちが、そう呼んでいたようだ。この頃は、何ともやりきれない毎日だった。学校も楽しくないし、予備校はやめた。放課後は家に帰って、また一人で部屋にこもっている。性格が歪んでもおかしくなかった。ただ、この時も、やっぱり本に助けられていた。学校の宿題もほとんど、授業中に終わらせていたし、特に予備校みたいに予習をすることもなかつ

た。

なんとも、小学校四年生にして、すでにダメな生活に、どっぷりとつかっていた。

この頃、今でも忘れられない事件がおきた。健ちゃんは怪物が大好きだった。ひとつ二百円くらいの人形をどのくらいだろう、三十体くらいあっただろうか。それがあつた日、学校に行っている間に、ひとつ残らず捨てられたのだった。母親を恨んだ。心底恨んだ。何も信じられなくなってしまった。大人とはこんなことを、平気でやるのかと、自分の親を初めて客観的に見た出来事だった。

しかし、予備校はやめても、インスタントラーメンは作っていた。何か違った方向にベクトルが向かい始めた。相変わらず、家は貧しかったので、ご馳走というようなものはないが、自分で何かを作るといふ楽しさを知ったような気がする。ご飯を炊くことも覚えてた。その頃は、保温ジャーなどなかったので（少なくともうちにはなかった）、冷えたご飯があると、焼き飯も作った。卵焼きらしきものも作った。レトルトのハンバーグや冷凍のピザが出始めたのもこの頃だ。毎日が新鮮だった。放課後の時間が楽しくなったのだ。ただ、あまり食べ過ぎると、夕飯が食べられないので、子供なりに、その点はいろいろ考えていたようだ。余談だが、その頃の母親が作る料理で、一番好きだったのは、ケチャップうどんだった。ゆでうどんの玉麵を、ケチャップで炒めただけの、粗末なものだった。しかし、それが旨かったのだ。具もなにもない、ただうどんの麵がケチャップと絡まっているだけのものだった。ケチャップうどんが、その頃の我が家を象徴しているのだろう。

## 十

相変わらず、ドン臭かった健ちゃんは、体育と音楽そして図工の成績は悪かったものの、他の教科は五段階評価で、みな五だった。もちろん家庭科も五だった。二学期は予備校騒動などで、慌ただしかったが、三学期になると何となく気持ちに余裕が持てた気がする。そして、恒例の三学期の学級委員である。短い期間だから、何の苦にもならなかった。何をしたのかも覚えていない。すぐに過ぎ去って行ったのだろう。冬休みも、予備校の冬期講習には通わなかった。まあ、いまさら通えるはずもないのだが。そして、迎えた春休みは、何とのびのびとした二週間だったのである。ほとんど家から出ていなかったはずだ。つまらない宿題もない。新年度には、クラス替えもある。少しは楽しい学校生活になるかもしれない、淡い期待を抱いていた、健ちゃんであった。

新年度がやってきた。少なからず、期待していた。クラス替えはあったのだが、残念ながら、担任がまた佐々木先生になったのだ。佐々木先生には、どうしても馴染めなかった。上っ面だけの教師に見えて仕方がなかった。偽善者。その時、この言葉を知っていたならば、おそらく心の中で、つぶやいていただろう。後々の事だが、この佐々木先生は、校長になり退職した。なんかわかる様な気がした。自分は、今野先生のように、現場で最後まで汗を流す先生が好きだったのだ。

それでも、健ちゃんは、表向きは優等生であったから、普段怒られることはなかった。新年度、五年三組になった。始めは、およそ四十人のクラスメートが、名前の五十音の順番で席に着いていた。最初に行われたのは、席決めであったと思う。と言うか、そのことが、一番に印象に残っている。席決めは、先生の独断で行われた。別にどこでも良かった。その当時は、目も悪くなく、一番後ろでもかまわなかった。指定されたのは、真中あたりだったと思う。そして隣には、クラスでも一番のガキ大将、黒田清志君が座ることになった。おそらく佐々木先生の策略であったのだろう。何を期待しての席決めだったかは、いまだにわからないが、その席に決まったことは、そして隣が誰だったかは、今でもはっきり覚えている。四年生の一年間を見て、健ちゃんの性格を判断したのだろう。少し試練を与えてやれども、思ったのかもしれない。それはどうかわからないが、健ちゃんにとつては、あまり関係がなかった。もう一人で過ごすことに慣れ、周りはいあまり気にならなくなった。だから、隣が優等生でも、ガキ大将でも、女子でも、男子でも同じことだった。

ところが、不思議なことに、黒田君と健ちゃんは、妙にうまが合ったのだ。健ちゃんも友達がいなかったが、黒田君も、どちらかと言うと、クラスメートに敬遠されていたのだ。席を並べていたので、何かと授業中、ボソボソ話しをしていた。宿題の答えも教えてあげていた。遠足でも同じ班になった。そんなことをしているうちに、黒田君は、相変わず、ガキ大将ではあったが、嫌われ者ではなくなっていった。皆の先入観がなくなつたからだろう。確かに粗野なところはあったが、嫌われるような男ではなかったと思う。それが、佐々木先生の狙いだったのかどうかは、わからないが、健ちゃんも黒田君も、なんとなくクラスメートに馴染んでいったような気がする。二人はさらに仲良くなり、健ちゃんは、黒田君を清志、黒田君は、松ちゃんとお互いに呼ぶようになった。別に健ちゃんが黒田君の事を、一方的に呼び捨てにしたわけではなく、みんなが元々、清志と呼んでいただけのことだったのだ。

だが、そんな健ちゃんだが、休み時間は、相変わらず図書室にこもっていた。この頃になると、ノンフィクション物を、ほとんど読んでしまっていた。こうなると手当たり次第、面白そうなタイトルを探して、読み漁った。幸せだった。図書室での放課後は、この上ない楽しい時間だった。この頃から、伝記物なんかも、読むようになってきた。日本の戦国武将の伝記などは、面白くて仕方がなかった。武将だけではなく、その他の偉人たちも、次第に友達のようにになっていった。中でも、誰が書いたのかわからないが、坂本龍馬の伝記が面白く、憧れを抱くようになった。一方では、卑弥呼などの伝記も読んでいた。その延長線なのだろうか、小学生のころから、古事記や日本書紀などにも興味を持った。その後、世界の神話や伝説の物語など、大いに読んだ。取り留めもなかったが、とにかく読み漁っていた。ただ、何故か一年生の時に、今野先生に読んでもらった「みどりのゆび」が忘れられず、時折、読みなおしていたことを覚えている。今でも、時々読み返して、ホッと安堵していることがある。このオヤジが、である。

## 十一

五年生の夏休みを迎えるころ、母親はいろいろと考えていたらしい。予備校もやめた。ドリルもやらない。そんな息子の中学受験を、まだ考えていた、母親としては、何とかしたかったのだろう。百数十人の学年の中で、中学受験をするのは、せいぜい四五人だった。そんな地域だった。みんなが貧しかった。地域全体が貧しかった。生活保護世帯も多く、給食費を払えない家庭も多かった。そんな中で、私学の中学校へ入れると言うことは、並大抵の事ではない。すでに姉のみえちゃんは、女子大の附属に通っていた。さらに、もう一人私学に入れるなどと言うことは、常識では考えられないことだった。どこにそんなカネがあったのだろう。オヤジはしがない公務員である。今、考えても不思議だ。いかに両親が苦勞していたかが、偲ばれる。ただ、健ちゃんの性格では、学区内の公立中学校では、やっていけないと思っていたのだろう。そのころの中学校は、窓ガラスは割れていて当たり前、頭は坊主刈り、教育指導の教員は竹刀を持っていた。かなり荒れていた中学校だった。どれをとっても、健ちゃんには勤まらなないと考えていたようだ。確かにそうかもしれない。弱虫で泣き虫の健ちゃんである。母親としては、心配だったのだろう。

そんな時、母親は新しい塾を見つけてきた。あまりに近くで、気がつかなかったのかも。隣の家の伊東君の父親は、小学校の教員だった。伊東君の家は、五年生になっ

てすぐに引越してしまったので、そこは借家として、誰か他の人が住んでいた。その家の二階の一室で、伊東君の父親が、週に三回程度、寺子屋をやっていた。まさに寺子屋だった。生徒は全部で四名。そのうち、一人は健ちゃんと小学校で同じクラスの、荒井さんだった。あとの三名は、どこからかは知らないが、バスに乗って通って来ていた。

五年生の二期の途中からだっただけだと思う。そこへ通うことになった。通うと言っても、階段を下りて、また階段を上げれば良かった。近い。これだけで健ちゃんは、取りあえず行ってみようと思った。寺子屋の五人目の生徒となったのだった。

初めていった時の事を、今でも忘れはしない。先生は、確か六時頃来るはずだった。部屋の鍵は、荒井さんが預かっている、管理していた。健ちゃんは窓から見ていて、荒井さんが来たので、そそくさと出かけていった。待っている間、みんなシーンとしている。健ちゃんは、何故か可笑しくなって、噴き出してしまった。それにつられて、荒井さんも噴き出していた。荒井さんは、ハスキーな声で、どことなく大人びていた。そのうちに先生がやってきた。挨拶をすればいい事だった。

「今日からお世話になります。松橋健一です。よろしくお願ひします」  
何度も練習していた。家では完ぺきだった。だが、最初のタイミングをはずしてしまい、言いだしそびれてしまった。荒井さんは良いとして、あとの三名は、何だかわからなかったと思う。先生は、今日から来るということはわかっていたので、別段驚いてはいなかったが。挨拶をしないまま、と言うよりできないまま、その日の授業に入ってしまった。

その寺子屋は、居心地がよかった。みんなで競うこともなく仲良く、しかし、授業は厳しくやっていくところだった。しかし、初めての日、無言で過ぎた約二時間。緊張感はずさまじいものがあった。そこでは、先生が授業をして、問題を解説し、みんなに新たに問題を出して、それに答えるという形式で授業を行っていた。初日の最後の頃に先生が、誰も回答できなかった問題を、

「じゃあ、おまえ、これわかるか」

と聞いてくれたのだ。健ちゃんは、すぐに答えて事なきを得た。予備校のような、殺伐とした雰囲気はなく、なにか暖かいものがあった。

それからというもの、伊東先生の寺子屋が大好きになった。荒井さんと健ちゃん、あと女子が二名、男子が一名、計五名。中学受験に向かって、勉強していくことになった。寺子屋でも宿題は出た。先生が、わら半紙に印刷して来てくれたものだった。これまでのように、最高水準問題集、自由自在などというものを、使わなくても良くなったのだ。原則

として、先生が作って来てくれた教材で、勉強していった。勉強というものがこんなにも楽しいものかと、教えてくれたのも、伊東先生だった。

## 十二

五年生の後半は、あつという間に過ぎていった。その頃はまだ、佐々木先生が好きになれずに、何かと言うと、おどけてごまかしていた。先生を嫌っていることを、悟られるのもまずいと思っていたし、クラスメートにも、前の事があるので、寺子屋の事は黙っていた。荒井さんもそんな感じで、二人の秘密のようなものになっていた。

六年生になった。クラス替えもなく、残念ながら担任も変わらなかった。これで健ちゃんも、三年間、佐々木先生の受け持ちとなったのだ。学校生活は、苦ではなくなっていたが、担任だけは重荷だった。ハッキリ言って嫌いだった。あまり目立たず、クラスメートと仲良くやっていきたかった。しかし、根がおちちよちよいである。何かと目立ってしまうことが、多々あった。ただ、クラスメートが笑ってくれて、ああ、助かったと言う程度の感じのものであったが。気持ちの上では、綱渡りのような学校での生活だったが、授業中に宿題を終わらせて、図書室にこもるという形は、基本的に変わりはなかった。

六年生になって、大きく変わったことがあった。それは、母親がまた新しい手を考えてきたのだった。東京の大手の進学教室だった。これは日曜日に、都内各地の私学の中学校や高校の教室を借りて、一斉に試験を行い、その後に、その日の試験の解説をするというものだった。つまり受験生各自の、実力試しだったのである。毎回、前週の成績が発表され、上位百名の名前が書かれた、プリントを渡されるのだ。

この進学教室は、楽しかった。なんせ、初めてひとりで渋谷まで出て（それも電車で）、そこからまたバスで試験会場まで行くのであった。それまでの健ちゃんの生活にはない、新しい事件だった。進学教室では、タクさんと言う友達もできた。何が楽しかったかと言うと、タクさんとの帰りに、渋谷駅のホットドッグスタンドで、ホットドッグを食べるこどだった。これは旨かった。健ちゃんは、この時ホットドッグを初めて食べたのである。マスタードって辛いんだなあと、実感した時でもあった。それくらいの小遣いはもらえようになっていた。今でも、この時のホットドッグより旨いホットドッグにはお目にかかっていない。こんなことから成績が良いはずはない。

百名の名前のプリントなんか、自分やタクさんには関係のない物だった。ただ、一度だ



け社会科のテストで、七十何番かになって、自分で驚いたことがあった。タクさんも驚いていた。後にも先にもそれきりだったが。

進学教室でも、授業はあまり聞いていなくて、みえちゃんのお下がりの、文庫本ばかり読んでいた。親からすれば、行ってくれるだけありがたかったかもしれないが、今考えると申し訳ない思いでいっぱいだ。健ちゃんにとって、毎週日曜日は、楽しみで仕方がなかったのだ。残念だったのは、私鉄に乗り換えるタクさんとは、渋谷で別れなくてはいけなかった。そして、進学教室が終わったら、音信が不通になってしまったことだった。

寺子屋の方も、相変わらず楽しく通っていた。ある時、伊東先生が、

「おまえは、これをやれ」

と、自分だけに、一冊の問題集を渡してくれた。今でもあるのだろうか。通称、電話帳。全国の有名私立中学の入学試験問題集だ。さすがに電話帳と言われるだけあって、かなりの厚さだった。これを見た瞬間、ああ、自分も受験するんだなあ、その時初めて感じた。六年生の二学期頃だっただろうか。さすがに、少し緊張したのを、今でも覚えている。遅まきながら、何故かその頃から、真剣に勉強するようになった気がする。伊東先生に恩返しがあったのかもしれない。理由は良くわからないが、電話帳も一生懸命やった。寺子屋でも、一番になった。それでも、難しくてわからない問題は、いくつもあった。そのたびに、もっと勉強しなきゃと、思っって気を締めめたのを思い出す。

そんなわけで、健ちゃんも私立の中学校を受験することになった。これから迫りくる大きな波などに、気がつくわけもなく、毎週一回のホットドッグを楽しみにしている、健ちゃんだった。六年生の時の楽しい記憶は、寺子屋とインスタントラーメンとホットドッグだけだったと言っっていいだろう。学校の話は、思い出したくないのかもしれない。

そんな健ちゃんには、明日の事なんかわかるはずもなかった。